

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
3 6 6	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)	
Secular Trends in Alcohol Consumption over 50 Years:The Framingham Study 50歳以上の飲酒傾向について フラミンガムスタディより	
執筆者	
Zhang Y, Guo X, Saitz R, Levy D, Sartini E, Niu J, Ellison RC.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Am J Med. 2008 Aug;121(8):695-701.	
キーワード	
飲酒、アルコール関連疾患、コホートスタディ、飲酒行動、疫学	
要 旨	
<p>背景： 飲酒パターンにおける人口動態は、政策担当者のための重要なデータであるが、通常、横断調査に基づいている。</p> <p>方法： 我々は、8600人のフラミンガムハートスタディ参加者より50年（1948～2003）にわたって繰り返し収集した自己申告の飲酒データを使用し、性別、年齢と出生コホートによる飲酒と飲酒パターンを検討した。</p> <p>結果： 飲酒者の間で平均的飲酒量が出生コホートと関連し減少していることが分かった。30歳から59歳の間で、年齢調整した結果、それぞれ平均飲酒量は、1900-1919、1920-1939と1940-1959年に生まれた集団別に見ると、男性では30.6 g/日、25.5 g/日、21.0 g/日 (P &lt; .001) で女性では14.2 g/日、12.3 g/日、10.4g/日という結果であった。すべての出生コホートにおいて、非飲酒者は増加し、飲酒者の中でも平均飲酒量は年齢と共に減少した。さらに、若い集団では高齢の集団に比較し中等度飲酒者の割合は高かったが、大量飲酒者の割合は低いという結果であった。また種類で見るとビールの飲酒量は減少したが、ワインの飲酒量はすべての集団において年齢と共に増加した。1900-1919、1920-1939年の集団で、40歳から79歳の集団のアルコール中毒者の累積発病比率は、女性（3.8%）より男性（12.8%）で、非常に高い結果であった。またこの傾向は、1900～1919年に生まれた集団の方が1920年以後に生まれる集団よりもわずかだが高い傾向があった。</p> <p>まとめ： 我々は50年以上の追跡調査の結果、平均飲酒量の低下とワインの飲酒量の増加を発見した。しかしながらアルコール中毒者の累積発病比率は減少傾向を見出せなかった。</p>	